注釈書について

前田正民

古典に関心を有つ人が多くなりつつあることは喜ばしいことである。随って注釈付の文庫本などが次々出て来て、平素古文に遠ざかっている人のため大変便利になり、私自身もその恩恵に浴することが少くない。しかしそれを見ていると、いわゆる孫引が多く、概歎に堪えぬことも頗る多い。書店の競争で、執筆者が催促されたりして、注釈を書く際、一々原文に当らぬためか、無責任に書き流していると思われることが多く、一寸見ても分かるような誤が屢々目に入る。

原文を引く場合には、原文をそのまま引く場合と、原文の大意を掲げる場合とがあるが、大意を載せる場合に、原文の意を取り違えたものも多い。このことはしばらくおいて、原文を掲げる場合、一字一句原文通りにすることと、漢詩漢文など原文にルビーのないのにルビーをつけ、逆に原文にルビーのあるのを省いて書くこと、或は原文の仮名を漢字に直し、又は漢字を仮名に改め、字体を変えることや、原文の誤っている処を訂正して記すなど色々の場合がある。学究的には、原文の一字一句をそのまま記すのが本当だと思うが、一般大衆のためには、原文を読み易くするためにルビーをつけたり、明らかに誤字と認められるものを訂正しておくことも、強ちに咎められぬことだとも思うが、原文を曲げて書くのは盲語道断と言うべきである。曲げて書かれたものが孫引されると、いわゆる一盲衆盲を引くこととなって読者を誤らす害は許されぬことである。

孟子はすでに「尽く書を信ずれば書無きに如かず」と言っているが、執筆者にはもっと責任を重じてほしいと共に読者も注釈については十分心してほしいと思う。殊にいやしくも大学で典籍を学ぶ若人達には特に留意を促したい。

ここにその一、二の例を挙げることとする。

平家物語巻三「赦文の事」の条に、「唐の楊貴妃、梨花一枝春の雨を帯び」という句がある。これは有名な白楽天の長恨歌の詩句「梨花一枝春帯雨」によったものであるが、本来は、「春、雨を帯ぶ」である。平家の作者は誤って春の雨と書いたのか、故意に春の雨と書いたのか分らないが、注釈書の手許にあるものを見ると次の通りになっている。

国文注釈全書平家物語抄

長恨歌に有梨花はなしの花を其一枝花盛なるに春雨のふりかかりたるは涙のこほれかゝるかとしとの義なぞ

今泉定介平家物語講義

白楽天の長恨歌に、玉容寂寞涙闌干、梨花一枝帯春雨と詠ぜり、

博文館校註国文叢書保元物語平治物語平家物語（鍾田正憲保持照次中野虎三太田幸三藤田啓吉校）

長恨歌に「玉容寂寞涙闌干、梨花一枝帯二春雨一、」と見えたり。

岡村書店溝口駒造平家物語新釈

長恨歌に楊貴妃の事をうたつて「梨花一枝春ノ雨ヲ帯ブ」とある。

明治書院内海弘蔵平家物語評釈

梨花一枝帯二春雨一とある、白楽天の長恨歌の句。

国民図書株式会社日本文学大系本

「梨花一枝帯二春雨一。」（長恨歌）

以上の通りであるが、唯一つ、宝文館御橋悳言平家物語略解には、

白氏文集ニ長恨歌に、「玉ノ容寂寞トシテ涙闌干タリ、梨花一枝春帯ブレ雨ヲ」とあり。

となつている。

武蔵野書院野村宗朔昭和校訂平家物語は特色のある本であるが、この頭注は、

白氏文集、長恨歌「李花一枝帯二春雨一」

と梨花も李花と誤植している。

長恨歌のこの梨花一枝の句は、枕草子の「木の花は」の条の梨の花の処に、

楊貴妃、帝の御使にあいて、泣きける顔に似せて、「梨花一枝、春、雨を帯びたり」などいひたるは、おぼろげならじとおもふに、なほいみじうめでたきことは、たぐひあらじとおぼえたり。（日本古典文学大系本による。）

とあるが、これも春曙抄には、本文に、

梨花一枝春雨を帯びたり」とルビーをつけ、注にも、梨花一枝帯ニ春ノ雨ヲ一と白楽天のつくりし事也。（岩波文庫本による。）

とある。

清少納言枕草紙抄（加藤盤斎）の本文にも、梨花一枚春ノ雨をおびたりなど

と「ノ」を送ってある。

しかし枕草子は他のどの本の注釈も殆んど「春帯雨」に従っている。

平家の注釈は、平家の本文が春の雨とあるのに引かれて原文まで曲げられたのだが、「春雨を帯ぶ」と和文で書いた場合、春曙抄のような読み方も生ずるわけで、日本文にはそういう誤解の出来ることも非常に多い。句読点も注釈上の重要な地位を占めるものであることを併せて注意したい。

次に謡曲「安宅」に、「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の山隠す霞ぞ春は惜めしき」という句がある。この、「山隠す霞ぞ春は惜めしき」の引歌について、

謡曲拾葉抄（大日本教育書院版による。）

山かくす霞ぞ春はうらめしき　下句いづれ都の境なるらん　古今集羇旅部におと歌也詞書云あづまのかたより京へまうでくとて道にてよめる云々

博文館大和田建樹謡曲評釈

山かくす霞ぞ春は恨めしき　下の句は。「何れ都のさかひなるら

ん」にて。古今集羇旅の部に出でたる。おとゝいふ女のよみたる歌。詞がきに。「東の方より京へ詣で来とて道にてよめる」とありて。本歌は前に比叡山を見たる歌なるを。此謡には後ろに振り返り見る心にして引きたり。

博文館芳賀矢一佐々木信綱謡曲叢書

山かくす霞ぞ春は　古今集おと、山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都のさかひなるらん

有朋堂文庫本謡曲集

山隠す云々――古今集「山隠す霞ぞ春は恨めしき何れ都の境なるらん」

日本文学大系本謡曲

山かくす　古今、羇旅「山隠す春の霞ぞ恨めしき何れ都の境なるらむ。」

観世流改訂本刊行会本安宅

古今集の歌「山かくす霞ぞ春は怨めしきいづれ都の境なるらん」

大同館書店野本米吉名作謡曲新釈

山隠す―末句「何れ都のさかひなるらん」古今集、おと女。

中央公論社野上豊一郎註解謡曲全集

山隠す（春の）霞ぞ恨めしき（いづれ都の境なるらん）―「古今集」巻九。

明治書院佐成謙太郎謡曲大観

霞ぞ春は恨めしき―古今集おとの歌「山隠す春の霞ぞ恨めしきいづれ都の境なるらん」を借りて、都の名残を惜む心をいふ。

右の通り、この引歌を全部の注釈書が古今集としている。その中、謡曲拾葉抄、謡曲評釈・謡曲新釈等は、上の句を別に記さずに、下の句だけ掲げ、有朋堂文庫本・観世流改訂本刊行会本は、上の句を「山隠す霞ぞ春は恨（怨）めしき」としてある。

一体この歌は古今和歌集（金子元臣古今集評釈による。）には、羇旅歌に

あづまの方より京へまうでくとてよめる　おと

山かくす春のかすみぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ

とある。

私の手許にある限りの古今集は皆右の通りになっていて、「霞ぞ春はうらめしき」となっているのは一本も見当らない。

処が古今和歌六帖（続国歌大観による。）には「山隠す霞ぞ春は恨めしきいづれ都のさかひなるらむ」とあるのである。

前掲の注釈はすべて、古今集として挙げているのは不当で、古今和歌六帖の歌として挙げるべきである。

古今集に「霞ぞ春は」とした異本でもない以上、拾葉抄等の書き方は杜撰という外はない。金子氏の古今集評釈には、「二句、六帖に、霞ぞ春はとあり。」と付記してある。謡曲「阿漕」などにも「六帖」の名が出て来るのを見ても、昔の人は「六帖」の歌に相当関心を有っていたことが伺われる。なお以上に示した通り、下の句が「なるらん」となっているもの「なるらむ」となっているもの、まちまちである。

以上二例だけを示したが、相当権威ある人の名で出ている注釈書に、この類のことが実に多いのである。

他人の注釈について、右のようなことを述べたが、さて自分自身を反省して、全く恥じ入ることもある。印刷にした場合、自分で校正が出来ない場合もあり、よほど注意して書いたつもりのが、とんでもない字を自分で書いていたり、校正の際再三注意したのが最後まで直っていなかったり、印刷技術上不可能であったりというわけで、後味の悪い思いをすることがしばしばである。

最も困るのは頼りになる原書の、手許にない場合である。それで私は原文を引いたりする時には、なるべくどこで出来た本のどの頁などと記すことにして、良心の責を塞ぐことにしているのである。

（昭和三六年二月六日）